第十一章　歴史の大要

新疆は古代之を西戎と呼び漢以下に及んでは西域と稱し、而して清朝は之を新疆と名けたり。其の西戎又は西域と稱するは、今の新疆地方より、葱嶺以西一帶、即ち東、西土耳機斯坦の總稱とす。史を按ずるに、秦漢の間は、北に匈奴、西北に月氏、更に其の西北に烏孫、(伊犂)烏孫の南に焉耆(喀喇沙爾)龜茲(庫車)莎車(葉羌)疏勒(喀什噶原)于闐(和闐)等の諸國、所謂西域三十六國を爲し、又其の西南に塞國、蟠在せり。匈奴の冒頓單于起るや西、月氏を擊ち、西南、塞を逐ひて、威西北に震ひ、一時烏孫及西域の諸國は、皆其の羈絆を受くるに至りき。

漢の西域と交通を開きしは、武帝(西曆紀元前百二十年代)張騫を大月氏國に遣せしに始まり西域諸國の漢に歸服せしは、有名なる定遠將軍班超の遠征に因る。是より前き、漢鄭吉を擧げて西域の都護と爲す。鄭吉乃ち、車師、(吐魯番)に屯田を設け、先づ匈奴の右臂を斷ちて、其の威勢を殺ぐ。然れども尚ほ未だ屈服せしむるに至らず。班超起つに及んで、漢の威大に震ひ、諸國概ね貢献せり。班超の歿後、班勇能く其威を持